

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成21(2009)年
3月号
通巻463号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

発行日 平成21年3月23日
発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
印刷 大倭印刷製
定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
振替口座 01050 6 67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



「瀬戸の春」高松・荘内半島・紫雲出山(しうでやま)にて 奈良市 和田 保さん撮影

昭和38(1963)年3月23日 月次祭法話より

大倭は味の宗教である、とは

法主 矢追 日聖 (満51歳)

神も仏も渾然一体

今日は、仏教における春のお彼岸でございます。仏教の教えは後から入ってきたものですが、祖先を崇拝するという日本人の気持ちによく合致して、相通するところがあるんですね。だから日本の在来宗教というものと渾然一体となつて、今日の日本の宗教が成り立っていることになるんです。

ある時代においては仏教と神道は大体一つのものとして考えられたんです。修験道と言いますが、そういう宗教は神も仏も一つになつております。これを両部神道と言っているんですけどね。

純然たる仏教の宗派でも、例えば、日蓮聖人は両部神道のような行き方をしているし、大和の古いお寺の境内には神社もあつて一山の守護神としてお祭りしている場合が沢山あります。

明治になつて信教の自由ということになつて、仏教、神道、あるいはキリスト教というように、形においては徐々にかなりはつきりとした様相に分けられてきました。けれども現代であつても、神道の中にも仏教があり、また仏教の宗派の中にも神道というものも入ってきているんです。

大倭教というものは、まあ神道の内に入りますけれども、昔のいわゆる神道とはちよつと意味が違つて。また、現代あちらこちらにあります教派神道というふうなものでもないんです。

大倭教は、純然たる「神ながら」の宗教であつて、どこの神道、どこの教派からも分派した物ではないんです。独立独歩の、一つの新しい宗教的な方針の団体であります。

霊界に直結した教え

終戦後に、宗教法人法という法律が制定されて新しい宗教が認められることになった時、昔の教派で言えば十三派神道、教派神道ですね、そこで元教師をしていた人が分かれて一派を立てるといふような面があつたんです。いわゆる新興宗教という形ですね。

私自身は大倭教を始めましたが、別に僧籍に入つたこともなし、また神主になつたこともなし、そうした意味において自分の師匠というものはありません。人間的な関係はないんです。

私の師匠は、この人間界に居らない。生まれつき持つてきた一つの使命、いわゆる運命とか宿命、そういうものが私の本当の師匠になつていて、皆、天の啓示を受けたとか、いろいろな神懸かり的なことを言われますけど、その点におきましては、私もまあそういう種類に入るんです。

すべては現界、現実世界における自分以外のところ、いわゆる霊界、霊の世界から人格霊が出て来て、教化されたんです。自分がこつした運命、宿命に生まれて来ている、その因縁というものを、霊界のいろいろな種類の人格霊を通して教えられてきたんですね。そういうような意味合いで、この大倭教というものは、純然たる霊界と直結したところの教えです。

けれども、大倭教の宗教はかくかくであるといふ一つの宗教哲学として言葉で説明したり文字で書いたりするようなものではないんですね。とい

うことはね、過去においてもつと立派な宗教家あるいは大聖者が、この地球上に現れてきておられます。その人たちが、言い残したこと、書いたこと、あるいは実行したことは、とてもじゃないが私なんかでは及ばない面があるんです。

だから、大倭の教えはこうであると仮に一つの教理として発表したところですよ、もうすでに世界の誰かが言葉として、文字として言い残しているに違いないんです。私の若い時は案外、宗教的な本は読まなかつたんです。もつと言え、読ませてもらえなかつたんですね。これは普通のひと、ちよつと違つたところがあるんです。

猿真似の知識

仮に、宗教に関係した書籍を読みたくても、目の奥が針でもまれるように痛くなつてきて、もの二ページも読めないんです。だんだん読めるようになったのは三十歳を過ぎてからです。

その頃には、霊の世界からあれやこれやと教えられて、大体一つの宗教の概念、宗教とはこうであるといふものを、人の知恵を借りないで、私自身が自分の心の中から湧き出るものとして持ち始めた。これは味の問題ですけれどもね。

そういうものを自分ではつきりつかむという、言い換えれば一つのものさし(定規)を持つたわけなんです。ものさしを持たされて、そうなるからは人のものを読めるようになってきました。

ところが人の本を読んだ時に私は驚いたんですよ。自分で体得した宗教的な教え、教理というものが、結局、自分が悟つている以上に、巧みな言葉で表現していることが沢山あるんですね。特に仏教の中にそれが一番あつたんです。何とまあ過去には、学者とか哲学者、聖人とか君子というよ

うな偉大な人が幾人も居つたということがね、よく分かつたんです。

おそらくその人たちもまた神秘的な体験によつて湧いたものを、上手に書き残されたのだと思うのです。今、私が、私に起きたような、霊界から教えられたことを言葉で書けと言われたとしてもね、昔の人たちのように巧みにはできません。自分で分かつておつても、表現することがなかなか難しいのです。

だから逆に考えれば、まず人の説とか本を読んではしゃば、自分の頭にこびりつくように捕らわれてしまふ。今度、本当の霊界からの教えが来てますね、素直に受け入れることが出来ないし、迷いが生じるんですね。

人間界では、学校で学んだり本で読んでいろいろなことを勉強していれば、知識がある人だ、立派な人だと言われるのですけれど、それは猿知恵だと、ある人格霊に私はよく言われました。

言い直すと、人の物真似だ、自分のものじゃないという意味ですね。人のものを見て取つてくるのだから、それは猿真似ということだ。

自分から出てきたものが、人のものと一致するなら構わないのです。が、大抵の人は沢山の知識をただ詰め込んでいて、自分から出てきたものは何も空っぽだ。そのように猿真似しているだけなら知識は何にもならんと、よく今日まで注意されてきたんです。

そこから考えてみて、宗教に關しての教えや書籍といふものは読めないように、神様からさせられてたんだなということが、まあ三十歳過ぎてから自分で分かつてきたんです。

一面、猿知恵は必要だといふこともおつしやつていて、始め、猿知恵が必要とはどういふことなのか分からなかつたんですが、現在こう

しているいろいろ申し上げていることで、過去において別の人が教えていることなんです。大倭やらと違って、別に珍しいこと、新しいことは一つも言っていない。みんな世間並みの話なんですね。

いつとはなしに染み出る味

大倭に世間の宗教と違う良さというものがあるとするなら、今言うように霊界から直接来た教えを持つているところです。それを言葉で表せば、過去のいろんな人が述べられていることと同じなんです。言葉では一緒ですけども、そこに一緒にならないところの味が大倭にはあるんです。その味を説明してみよと言われましても、これはちょっと難しいんですよ。

例えば、ここに梅干しが一つあったとする。この梅干しの味を、梅干しは酸っぱいと説明されても、水分が何パーセントで酸が何パーセントとか科学的に分析をされてもね、味は分かりません。しかしですよ、梅干しを黙って口の中にポンと放り込まれたら、説明しなくても赤ん坊でもその味は分かるんです。

今言いました宗教の味も、そういうものですね。自分の知恵で味わうんでなしに、自分の心で、自分の魂で、自分の霊というものでもって噛み締めなければ、大倭の味というものは絶対分らない。大倭の宗教の哲学だの教理だの、あるいは組織やとか、そういうような世間並みの宗教の概念でもって大倭教を見ておられると、これはもうありきたりの宗教とそう変わらない。

ただ大倭は正直な宗教であると言える。世間によくあるような営利本位の宗教団体でないということとはね、これは誰が見ても分かることなんです。

誠実な宗教であることも分かってもらえらると思えます。

ところが大倭の宗教の本当の味というものは、日本全国にあるいろんな宗教とはかけ離れた独特の味と言えるのですが、梅干しの味と同じことで、自分の魂でもって噛みしめなければ、その味はにじみ出て来ないんです。ということはね、こうした大倭の教え通りに長い年月、世の中を歩んで生活していくと、そこに、いつとはなしに言うに言われない味が染み出て来るんです。

だから今、この宗教に入ったら、やれ御利益があるとか、やれありがたい宗教だとかいうようなことを言う人には、非常に難しいことなんです。一年や二年とか、三年、五年ぐらい研究したからといって、その宗教の本当の良さとか味とどういふものは、なかなか分らない。分らないのに、この宗教は良い宗教やとか悪い宗教やとか言う人間はね、これは軽率過ぎるんですよ。

ところが世間を見ると、日本人の宗教観というのは非常に低級なことが多いんです。一つの宗教の味を味わおうというように、深い考え方で信仰する人は案外少ないんです。

因縁という説明の仕方

ただ目先の欲で信仰して、果たして人生が自分たちの希望通りになるかどうかと言えば、これはめったにならないんです。自分たち人間の邪な、汚れ、歪んだ、欲の深い考えでもって信仰に入り、手を合わせて神仏にすがって、お経をあげたり祝詞を唱えたりしたら聴いてくれるような神様があらたら不思議なんです。そんなものを聴くんだら、それは悪魔であって、決して神様じゃありませんよ。

「聴く」ということは、結局はね、キリストで言うように、博愛の心なんです。一切は平等なんです。神の心というものは、一切が平等であって、人間がたとえ一人でも不幸なら、社会から落伍しないようにと動いてくれるんです。神の心はそうなんです。

ところがですね、こっちの受け入れ方によって、それが薬になったり毒になったりする場合も出てくるんです。喩えて言えば、この目の前の山を見て、南向きに自然に生えた草木というものは、非常に太陽の熱も受けて、うまく育っています。反対に大きな松や杉、檜だとか大木の下で日が当たらないとか、北向きの日陰の所へ種が落ちて、そこで芽生えた草木は惨めなんです。

けれども太陽自身は、平等に生物すべてを育てる為に熱を送っているんです。春になってくると、気温も高くなつて草木が青い新芽を吹いてくる。そうしてまた雨は雨として降ってくる。その旬、その旬において大自然は、みんな平等に幸福になるようにという心で動いておるんだけれど、たまたま大きな木の下で、あるいは北向きの日陰で根を下ろした草木は、その恵みを受けることが出来ない。

本当に平等な天の恵みがあるのだけれども、その受け方がね、同じようではない立場のものが出来てくるんです。

人間の世界の中でも、そういうような自然の現象というものがあります。これを仏教では因縁と呼んで、あの人は因縁が悪かったとか良かったとか言います。釈尊は、因・縁・果の原理でもって説明されたんですね。大きな木の下の日陰に種が落ちるのは、悪い宿命というものがあつたんだというわけです。

鳥が実を食べると糞の中に種が入って、糞が養

分となつて発芽していくというように自然は出来ているんやけど、その鳥が、たまたま日の当たるところで糞をしてくれたらね、その草木は良く育つんやけど、たまたま裏の方へ飛んで行って日陰で糞をしたら、そういう悪因縁の所へ種が落ちたということやから、もう一生仕方がない。

そのように因・縁・果という一つの原理でもって説明されたのが、現在我々が言うところの因縁ということですよ。これは諦めの哲学のようになりますけど、まあ釈尊でも仏教でも、やっぱり説明が難しかったのだなと思います。

説明の仕様がないう世界

世の中というのは、我々人間の知識で解決出来ない、及ばないような宿命で組み合わされているのです。これは人間の力ではない、自然にそういうふうに出てくるのだから説明の仕様がないう。このことは、法華経の「方便品」の中に、「唯佛與佛、乃能究盡」と書いてあります。創価学会の人なんか、よく唱えている。本当の釈尊の心というものは、お前も悟りを開いて成仏成道してね、菩提樹下において瞬間に悟り正覚を得た釈尊のような心境になつたら分かる。そうなつた者同士でないと語り尽くすことはできないことだと言われている。

言葉では分からないけど、同じ体験をし、悟つた者が二人居つた時に、目の色一つで「あ、あれか」と分かる。説明の仕様がなくても、不思議ないわゆる因縁因果の、その本当の理というものは分かるんだと、まあ、そんな意味です。

お釈迦さんのような大哲学者でも、因縁というものその本当の味は説明できなかったらしい。まして我々のような凡人が説明できたら、その方

が不思議なんです。舍利弗というふうな、お釈迦さんより知恵があつたというくらい、知恵第一の偉い弟子でさえ、釈尊の言うことは分からないと言つたんです。

釈尊は、分からなかつたら信じたらいいんだとそんな言葉を使いはつたらしいです。理屈では説明できないということですね。

本当の味というのは、言葉とか文字、あるいは話ではなかなか分からない。そこを一つの基礎として、そこからもう一つ踏み込み、超越した世界において、その味を自分で噛みしめなければいけないんですね。

現在の大使の宗教も、霊の世界から直結している現界においての宗教なんです。現在生きている自分と霊界における自分の心が通じるようなね、そういう正覚というか、悟りというか、そういった心境になつてこなければ、その味は分からないのが本当なんです。そういう尊い世界が大倭にはあるということ、皆様方には信じてもらいたいんです。分からないけれども、信じるのです。ここが信仰心の世界なのです。

日々の生活の中で回向を

その世界に、自分の魂というものが到達する為に、日々手を合わせて過去を振り返り自己反省し、たとえ一歩でも神の心に近づくような人間的努力をしていく、これが正しい信仰の姿なんです。

今日は彼岸の、先祖を思い出す日ですけども、先祖と自分というものは直結しているんです。いわゆる因縁が一番深いのです。だから自分が悟つて、喜びを持てる人間になつた時には、その清い美しい波長というものが先祖の方へ向かつて行きます。それを先祖さんが喜ばれたら、その心が

また子孫に回つて来る。すると子孫が喜ぶよふなことが、日々の生活の中に起こつてくるんです。その原理を仏教では、お釈迦さんはね、回向という言葉で表しています。回向という言葉は、向こうに回していくのだけれど、自分に返つて来ていくという意味です。

回向供養は、お彼岸だけ拜んだつてダメなんです。結局、日々の生活の中に先祖さんが居るのだから、自分自身が悟つて先祖を喜ばすよふな日々の生活でなければ先祖は喜んでくれない。そういう意味をよく理解されて、このお彼岸というものを、先祖と共に有意義に暮らすよふに心得てほしいと思います。(文責・編集部)

こぼれずみ 奈良興隆原市 伊藤 克夫

「若き日に自らの作り主を覚えよ」とは有名な聖書の言葉ですが、僕の若き日は、やはり今から考えると、宗教的なメンター(指導者・師)をさがし求めていたのだらうなと気づく。パスカルやモンテーニュ、ニーチェやドストエフスキーや、莊子を、あるときは読書会で、あるときは河原で、ジャズ喫茶で、図書室で。ぼくらの15年以上前の大学の先輩がキャンパスのポプラを切り倒してしまつたころ以降、教養という言葉は昔日の生命を絶たれた印象があります。

先日、作家の村上春樹氏がイスラエルでの受賞会のスピーチで、「作家の大きな仕事の一つは敵の胸に響く言葉を辛抱強くつむぎだしていくことだ」という趣旨の話をされていた。

誰もがバイアス(偏向)のかけられた窓から世界をみている。今の時代の教養は、窓のなかの住民の胸にバイアスを解く言葉を届けられるかということに近いのかも知れませんね。

交差点 9

奈良県大和郡山市 矢部 次郎

目指せJリーグ！
「奈良クラブ」設立

二〇〇六年八月、私は十シーズンのプロサッカー選手を終え奈良に帰ってきました。「奈良からJリーグを目指すサッカークラブを作ること」それが目的でした。

現在Jリーグ加盟のクラブは三十六。準加盟クラブ数四、その他Jリーグ参入を目指すクラブは数百とも言われています。サッカーの場合クラブチームを作り、結果と運営が認められれば誰でもJリーグ入りできるシステムとなっています。

世界中のそれぞれの地域で毎週末試合が行われ、子供からお年寄りまでが地域のシンボルを応援する風景が見られます。それは地域住民が一体となるお祭りにも似たもので、ひとつのプレー、ゴール、試合結果に一喜一憂する姿は感動的です。実際に試合や遠征を通じて私も肌で感じてきました。しかし、当時奈良にはそのようなクラブは存在せず、私も地元のためにプレーできないままにサ



ッカー選手を終えることになったのです。なぜ奈良には無かったのか。スポンサーとなる大企業が無い、奈良では無理だ、たくさんの声を聞きました。そうではなく誰もしようとしなかっただけなのです。当然ながら奈良の子供たちはサッ

カー選手のプレーを観ることも一緒にボールを蹴ることもありません。「これでは奈良の子供たちがかわいそうだ」と感じ、まずサッカースクールを設立し、同時に奈良県のサッカーの状況を調べることになりました。恩師や友人を頼りに情報を集め、草サッカーレベルの試合も視察し、車のトラックにはいつもボールとスパイクを載せていて、家庭でサッカーの練習を見つければ飛び入りで一緒にボールを蹴らせてもらいました。

奈良県の実況が理解できた二〇〇八年に奈良からJリーグを目指すサッカークラブ「奈良クラブ」を設立。奈良県一部リーグを戦いました。しかしJリーグを目指すと言っても練習グラウンドも無く選手もまばらにしか集まらないという状況で、夜の公園を街灯や懐中電灯を頼りに走ることでしかできません。自分の経験と情熱、そして賛同してくれた仲間だけがモチベーションでした。

その頃元日本代表である母校のOB柳本啓成さん(奈良市藤ノ木台出身)が奈良のサッカー向上のためにグラウンドを設立することになり土地探しから全てお手伝いさせていただくことになりました。そして昨年六月奈良市宝来町に「ヤナギフイールド」が完成。私はサッカースクールを担当し、奈良クラブの練習場所もスポンサーしていただけることになり本格的にチームが動き出しました。環境が整い始め県内の意識が高い選手も加入し奈良クラブは奈良県を制覇。

さらに今年一月、近畿圏内の上位チームが争う大会にも優勝し、関西リーグ二部へと昇格を決めました。雨の中大阪で行われた決勝戦にはサポーター、スクール生や保護者の方二百名ほど応援に駆けつけていただき会場は奈良クラブの「ホームゲーム」となりました(写真)。優勝カップを掲げた瞬間のみんなの笑顔は忘れられません。

こうしてひとつの目標を達成しましたが、Jリーグを目指すにはまだまだ問題も多くあります。クラブの法人化、資金調達、チーム強化、プロモーション活動……数え上げればきりがありません。しかし私はこの中で「苦しい」とか「しんどい」とか思ったことがありません。自分が好きな「サッカー」と「奈良」をテーマに活動できることが喜びとなっています。

そして不思議なつながりを感じることがあります。Jリーグのトップからアマチュアサッカーの底辺までを落ちたこと、ケガで引退を余儀なくされたこと、アルバイトでサッカースクールのコーチをしたこと、すべて本意ではありませんでした。が今の活動にすべてつながっていますし、グラウンドの土地を見つけた場所は私の両親(矢部顕・后代)が知り合った場所であり家族の原点でもある大倭のすぐそばであるということも不思議な力を感じます。また両親や家族、友人、知人のおかげで多くの方々と知り合うことができ自分を成長させてくれます。まるで誰かが自分をコントロールしているかのようなことが自分と自分は生かされていると感じるようになりました。家族、友人、経験、土地、そのすべてが自分を育ててくれたと思えるのです。私はそのすべてと自分を大事にしてこれからも自分ができることを精一杯努力していこうと思っています。

最近の不況で企業スポーツチームの廃部、撤退が多くあります。クラブというのは地域に根差し市民県民が楽しむものです。今の時代だからこそ地域一体となって元気になる必要があります。奈良にはその可能性が充分にあると思います。いつか奈良のスタジアムが超満員となり、Jリーグの優勝を争い、世界へと挑戦できる日を夢見ています。皆様のご協力やご支援、宜しくお願いします。

「だま」と「だま」

「森からきた便り」を拝読して

奈良市 川端 一弘

昨年の「おおやまと」十月号に村木哲氏の「森からきた便り」という一文が掲載された。森について具体的に書いておられないが文面から推すとアフリカのゴリラが生息する森のことを主体にした意見であった。私はひとつの極論として読ませていただいた。

ところでその論難される側の一員(調査・研究というのはおこがましいがあえて一員に加えてほしい)として個人の意見を述べてみたい。(注、氏は広く人類に対して問題を提起しているが)私たちの生活は目に見えない多くの人達の努力により支えられている。豊かな国ほどその目に見えない努力の成果を享受して支えられている。現在の日本は衣食住あらゆるものが日頃意識しない世界中の人々の努力により成り立っている。その努力は必ずしも報われない犠牲のうえに立っていることもある。たとえば何気なく立ち寄るコーヒーショップにしてもその豆は世界中の産地から輸入されるいろいろな味わいを楽しませてくれる。しかし、味わいの豊かさの裏には資本主義という過酷な仕打ちが待っており、安値競争という争いが日々席卷している。グローバル化という内実にはこのような過酷な競争が存在する。生活のために切り開いた森(国際資本とプランテーションについては紙面の関係上触れない)にはそのような背景もある。私たち豊かな日本は日々気が付かないでいるがこうした犠牲の上に生活が成り立っている。安定した物価という背景には貧困にあえぐ人々の犠牲の上に成り立っていることも多いのである。開発という行為は自然の破壊により成り立って

いることもある(こともではなくそのものと思えます。持続可能な開発などは言葉のレトリック)。今後も増大する世界人口に対応するにはさらなる自然破壊を行わなければその豊かさは維持できないであろう。今もブラジルでは農業拡大のために森が切り開かれている。当然絶滅に追いやられる種も多くなつて行きます。

現在のように巨大かつ大量な豊かさの追求の背景にはそのような状況が世界のいたるところで生じている。

その発生を阻止するには何が有効であるのだろうか。地球の温暖化を含めあらゆる地球の危機に対して何が必要で何が有効なのでしょう。

絶滅危惧種の指定はそれらに対する最低限の私たちへの警告なのです。ただ現在はその警告に科学的な根拠を求められます。数値的な論拠を求めます。歴史を調べるとすぐに気付かれると思いますが、初期の自然保護には科学者とよばれる人々が学術上貴重というところのみを主張すればよかったのです。

現在の人間の生活は自然の破壊と密接につながっている(以前の素朴な農業も開墾という自然の改変であり、人工林・植林、林業も自然の改変ですが)。豊かさとは地球(ローマクラブがすでに地球の有限を提起して久しい)との関係は人類が直面する大きな課題でありどうしても解決しなければならぬ課題です。それなしに有限である将来の地球環境はありえないです。

残念ではありますが人類の豊かさは原始のままの自然を大きく喰いあさつて進展し維持されていきます。豊かさの基盤を考えると重要なこととであり、その基礎的な知識もまた調査者(研究者)により提供されているのです。

(平成21年1月20日)



「何とかしなくては」

― 現実に直面して ―

本紙一月号で高倉敦子さんが紹介してくれた水俣での賑わい塾にも参加していた、「NPO法人自立生活サポートセンター・もやい」の稲葉剛さんが去る三月四日に来邑されました。

「もやい」は、十年ほど前から東京で野宿者の支援活動を地道に行っていたグループですが、昨年末から年頭にかけて日比谷公園に設けられた「年越し派遣村」の中核を担ったことが、テレビや新聞で大々的に報ぜられて、一気に全国的に知られることになってしまいました。

そんな活動の中心メンバーであるとはとても思えないほど、稲葉さんは静かに淡々と語る人です。稲葉さん達は、一九九四年頃にバブル崩壊で増えはじめた東京の野宿生活者が路上で次々と亡くなっていく現実に直面して、「何とかしなくては」と炊き出しなどの活動を開始したそうです。そして二〇〇一年に「もやい」を設立してからは、野宿者のアパート入居時の連帯保証人提供事業に取り組んだり、そうした人達が語り合えるような居場所づくりをする活動を進めました。

稲葉さんは、「世の中にこれだけ自己責任論が蔓延している中で、生活に困窮している当事者達が自己肯定できずに、精神的に自分を責めてうつ状態になっている人が多くいます。そういう人達が自分を肯定できる条件と場をつくっていくことが大切だと思うんです」と語る。

不況が拡大して貧困対策が大きな課題になっている今、稲葉さん達の草の根の活動は貴重なものでしょう。地下水の精神がここに生きているのを、ありありと感じました。

(岸田 哲記)

寸 莎

第83回

北川俊秋さん

農業一本

北川俊秋さんは、大倭の神饌用のお米を作らせて頂いている田んぼの地主さんである。田植えや稲刈りの時にはいつも笑顔で農作業の手ほどきをして下さる。ご自宅は大倭神宮の東、すぐ隣である。

「わしはこの生まれと違つんや。生駒郡安堵町、大和川のほとりですな、そこから二十歳で養子に来てんねん。ほんで地元の事でもおじいさんから聞いたりしてよつてに、大倭地の事もよく知ってるわけや。うちの前の坂は昔陣屋の坂や。こちら一体はやっぱり大倭神宮があつて、法主さんの話では昔神宮から鶏が出たとか、長曾根日子の屋敷がここにあつたという事で、昔は標木みたいのが立つてあつた事もあんなねん。わしは六人兄弟の次男。実家の奥山家も代々農家です。五反くらい柿



の果樹園もあつたな。平種ちゅう柿でな。宵の内から荷物こさえていて八尾・大阪の市場まで朝の三時起きしてリヤカーに積んで歩いて持つて行くんやもんな。ほんで帰つて来たら学校へ行くんや。王寺の駅通つた時分に汽笛が鳴つて、それが恋しいてな。乗せてくれはらんわんな、リヤカー持つて帰らんもん」

北川さんは昭和四年生まれである。「高等小学校を卒業して終戦になるまでは、森之宮にあつた大阪陸軍技能養成学校に行つとつたんや」

当時、大阪の空襲を体験されている。「あんな怖い事なかつた。焼夷弾が防空壕の入り口に落ちた時には火噴いとるから自分の服を脱いで火に被せて跳んで出たもんや。B29も段々低空飛行になつて、焼夷弾を雨あられと落として黒い雨が降つたな」

十七歳の時、終戦になると同時に国鉄公社に就職。貨車の入れ替えや

客車の編成に携わつた。「担当は湊町、今のJR難波駅でんな。あそこに貨物駅もあつたんや。二十四時間勤務で、夜中でも列車が入つて来ます。貨車やつたら荷を降ろすホームへ一つ一つ分割して放り込んだらなあかん。それは手旗信号で合図して来るのを受けてやるわけや」

二十歳の時、北川淑子さん(二十歳)と結婚。二十六歳で国鉄公社を退職した。「結婚式はこの家でやつたな。二十六歳で中町の自治会を初め、何もかも役をさしてもらいましてな。土地に入つてもたんですね。未だに水利の役したりね。」

水利でも農民独特の約束みたいなのがありますねん。上から下へ水は流れて行きます。ほんで上から順番に右、左と入れる。二十年位前までは水争いちゆうのがありました」

農業一本の生活が始まつた。「一番難しかつたんは牛使いですな。こつやあーやいうて教えるもんや違つしな。こつちに一生懸命になつたら牛横つちよへ行きよるねん。真つ直く行かざなあかんもん。そら苦労しました。慣れたら何でもないんやけどな。自分も慣れるし牛も慣れよる。まだ若かつたから親から怒られたかた素直になれたつちゆうかな反抗心でへんかつたな。」

昔は谷田が多かつたから夜中にて

も雨降つたら田んぼ見に行かんなん。電灯も無しで手探りでな。暗かつたら暗いように歩いてたら分かるねん。田んぼは元々二町位あつたんと違つかな。刈り入れの時やつたら朝星夕星や。寝てられへん。農業いうたら一番つらかつたな。」

北川さんは、五十歳を過ぎて十五年ほどの間、熨斗袋を作る仕事もされたが、機械を入れ内職を抱えての事業は中々大変であつたという。

法主さんの所には、川の名前や村の名の由来など地の人でも分からない事がある。聞きに行かれたよ。法主さんは考古学みたいな事を難しく言わんと、言葉は漢文で語んのかなしにカタカナで語りはつた感じでしたな。ほんだら一番悟り易いですやん。それに法主さんは誰とも話してくれはつたわ。わしらでもここへ養子に来てんのに道で会うたら、「おはようさん」ちゆうてな。昔、大倭の子供らを、菅谷から山越えて小学校へ送つて行くのに、大倭の歌を歌つて送つて行きはんのや、日元さんも一緒に。そんな時に会つたかて、おはようと言つてくれた」

「病気をされたそうだが、何時までもお元気でいて欲しい。北川さんの楽しみは、「喫茶店でいろんな人と話す事やねん」。(聞き手 李章根)

あじさい日誌

2月13日 千葉県柏市の畦倉充隆・美佳夫妻と高知から松本直之さんが来邑されました。

この日から西斎庭の排水路改修、土師部杜周辺の改修、教務本庁前通路改修等が進められました。3月7日まで。

2月15日 大倭神宮月次祭。

2月21日 夜、交流の家でF I W C 定例委員会がありました。

2月23日 午後1時20分から大倭神宮で申孝祭が行われ、2時から大本宮拝殿において月次祭が開かれました。祭典後、昭和39年2月23日の法話をお聞きしました。

3月4日 東方碑前の金柑を有志が収穫してくれました。

夜、東京の稲葉剛さんが来邑、交流の家で一泊。翌朝は大倭神宮に行かれた後、教務本庁で邑人4人と歓談しました。(6頁の関連記事もお読み下さい)

3月6日 大倭神宮月次祭。
夜7時から大倭会館で邑倭の会が開かれました。

3月7日 拝殿や斎庭周辺の枯れ木について法主さんは「無理に伐採しないで自然に任せよ。木が自分で倒れる方向を決めることおっしゃっていました。この日、拝殿正面から見て右側に立っていた枯れ松が、拝殿にも当たらず反対側の倉庫にも触ら

ず他の木々もまきぞえにせず見事に小道に沿って倒れていました。畏み畏みというところですよ。



矢追房子さん写

3月8日 大倭会主催の裸会。

昭和39年2月4日の玉緒祭法話をお聞きした後(先月号掲載分)、人の「死」等をテーマに話し合われました。最近、映画『おくりびと』が注目されているが、邑では当たり前に自分達で湯灌等をしてきたし、少し前まで大倭安宿苑の方でもそうだったので、「おくりびと」の経験者が多いということだなという話題もありました。

2~3月 昇ちゃん半額サーブの50円で「和み」のDVDを連日借りまくりご機嫌です。

大倭安宿苑では
2月24日 今春の新規採用者に事前研修会を行いました。

(菅原園)
2月15日 なら百年会館で春咲きコンサート。色々な方との交

流や屋台も楽しみました。

(須加宮寮)

2月26日 卓球大会で住死者・職員が一緒に汗を流しました。

(長曾根寮)

2月12日 (デイサービス) 紙芝居「金太郎」「鶴の恩返し」。

2月28日 家族会主催のお楽しみ会。コーラス隊による歌と、

ケーキ・饅頭・プリンから選ぶおやつバイキングでした。

(茂毛路園)

2月19日 2名の方の誕生をお祝いしました。

(八重垣園)

2月18日 有志で雑壇の飾り付けをしました。

投句箱より「予後の目に嬉しき

梅のふふみかな」

俳句の風物 上田森彦(98歳)

花冷えはかこちなながらも憎からず

富安風生

「まるで冬へ逆戻りした様で、

花見という

気になりま

せんな」

「でもこん

な日は熱燗

でじつくり

一杯という

のは如何で

すか」

二日目は

千鰯の尽

きし戻り

寒

森彦

編集後記にかえて

* 先月号の表紙写真を見て、藤沢美恵子さん(横浜市)が、1973年3月飯河梨貴さんと栗生楽泉園にトロチエフさんを訪れた時の写真のコピーを添えて手紙をくれました。その30年後、息子の真人さんもF I W C の現役キャンパー達と栗生を訪れトロチエフさんと会っているそうです。

トロチエフさんの人生と生涯について、もう少し詳しく知りたいという気持ちもよぎります。* 李さんの一文が印象に残りました。「街中で火が上がりはじめた」とありますが、彼のいた氷室町は山際に近く、おそらくかなり広範囲に街が見渡せたのだらうと思います。あの揺れを「ビンの中に入れられ、おもいつきりシェイクされたような」

と形容していますが、私はこれに感心しました。北区は兵庫区ほどの揺れではなかったのですが、私は勝立ちになるまでがやつとのことで、李さんのように立ち上がることはできませんでしたな。(神戸市 上野允士)

あんない

* 月次祭(大倭神宮)
4月6日(月) 午後2時より大倭神宮にて。

* 須佐緒祭(大本宮)
4月8日(水) 午前11時より大倭大本宮拝殿において祭典を行い正午より各自持参の弁当などで園遊会を行います。

須佐緒祭とは、宇宙万物一切の顕幽両面における一体のもとたる須佐(結び)の緒に感謝をするお祭りです。

* 大倭会主催第四八四回裸会
4月12日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

* 箭負祭(大倭神宮)
4月15日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

箭負祭とは、皇祖天神の鎮りまず登美の神奈備(大倭神宮)の靈威を法主日聖大恩師の遠祖(箭負氏)が代々祭祀し、神仕えしてきたことを記念するお祭りです。

* 月次祭(大本宮)
4月23日(木) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

第301回 大倭会文化行事 紫陽花邑の記録上映会

法主様撮影の8ミリフィルム等からDVD化。ちょうど命日に当たる鈴月かあさんを映像で偲ぶ機会にも。

日時：平成21年4月19日(日) 午後2時~4時頃

場所：大本宮拝殿

問合せ：杉本順一・岸野春子

TEL 0742-44-0015(教務本庁)